

THE昭和やな。
こんな世界
まだあったんや…

「創造・貢献・笑顔」を経営理念とし、製造や物流の現場で使われる特殊扉の設計・製造・施工を専門的に行う会社の経営者として私はいま仕事をしています。

本社は大阪府堺市・埼玉県蕨市に営業所があり38名（大阪34名・埼玉4名）のスタッフを率い、日本国内だけでなくタイにも製品を輸出しています。特殊扉？とよく聞かれるのでカンタンに説明をすると冷蔵倉庫・冷凍倉庫、食品加工場で使われる産業用扉のこと、ほかに内装で使われている潜水艦の扉やマイナス50℃の環境下でも機能する試験室の扉など様々な商品を作っています。商品はすべてオーダーメイド「こんな扉がほしい」というリクエストに合わせて1点1点を設計・製造・施工まですべて自社管理にて生産をしています。まだ世の中にないものを形にすることこそが私たちの使命、生産枚数は年間で約1,000枚。ですので月産70〜80枚。「扉だけ？」と驚かれることもあるのですが、扉だけに徹するからこそ、スピードも品質も現場対応力も極限まで磨くことができるのです。

お取引先は、味の素冷凍食品さんの製造工場、ニチレイさんの保管拠点、兵食さんの急速冷凍設備、神戸港湾エリアの組さんの大型倉庫などさまざま。巨大な保管施設の「入口」をわたしたちが守る。扉がきちんと閉まらなければ冷気が逃げ、微かな隙間があれば結露が落ち衛生にも影響します。扉は「バコ」の最後の要であり最初の要でもある。だから現場では、開閉スピード、通行頻度、清掃動線、気圧

差、風の巻き込み、床の段差に至るまで、こまかく確認しながら作業を進めていきます。設計図の中に現場の空気をカンベキに閉じ込める、それが岸産業の誇る技術の高さです。2025年6月、パターン化を進めた新製品を発売しました。完全オーダーの自由度は残しながら、共通部材を型に起こして工程を圧縮。手仕事の気品を守りつつ生産の合理化をすすめ生産キヤバの増強をはかっています。

岸産業は1958（昭和33年）祖父である岸良生が大阪・八幡筋で荒物屋を営みはじめたのがスタート。なぜ荒物屋だったのか？はいまとなつては分からないのですが、そこから心齋橋大丸百貨店に家庭用の木製冷蔵庫（上から氷を詰めるタイプ）の取り扱いをするよう変化していきました。さらにそこから専門性が高まっていくのですが、福島中央卸売市場で仲買人さんが競り落とした鮮魚を一時ストックするための超低温設備の独自開発に成功したのです。その頃はまだウレタンとかはなく代わりにコルクを詰めて製造していたようですが、福島だけではなく北部市場・茨木などの卸売市場にも進出。会社は順調に大きくなり職人は20名ほどになりました。販売に特化するのではなく、企画・製造・販売・メンテナンスまですべてワンストップで請け負う岸産業のDNAはこのころから醸造されていきました。

そして二代目として父 岸良光が祖父のあとを継ぎ、専門性をさらに突きつめていきます。防熱扉事業をスタート、国土交通大臣認定を取得した特定防火設備用防熱扉の開発（2008年）にも成功、東京事務所を開設（2017年）しました。事業は順調で時代はバブルだったただなか、新規事業案件も銀行さんがどんどん持つてくる時代、うちも例にもれず画廊運営

価値の伝えかたを変えれば数字はついてくる

